

## 私の仏教美術論

佐和隆研

日本美術史を概観すると、古代・中世の美術作品の大半は仏教美術の作品である。これらの作品に対する研究方法といえば、多くの場合にはその技法的・様式的比較研究を行い、作品の年代的な特徴を求め出し、その歴史を構成することを中心として行われている場合が多い。

美術の歴史という限りにおいては、上述のような研究が最初に行われなければならないであろう。しかし美術の歴史という場合、私はその表現の示している内容を汲みとって、その作者の芸術観、芸術精神にまで考えを押しすすめてゆくべきであると思う。そこに美術を通して、人間の精神的な展開の歴史が考えられるのである。

そこで仏教美術といった場合に考えられることといえば、その美術は仏教的理想を背後において制作されたものであることはいままでもない。したがって仏教美術について考える場合には、技法的・様式的な面の追究から出発して、そこに表現されている仏教的理想にまで考えを深めてゆくべきであろうと思う。日本の場合をとりあげていうならば、日本人の理解した仏教的理想というものがそこに表現されていることを考えなければならないと思うのである。

仏教美術といった場合、その表現のもとになっているものは經典に説いている内容の表現であり、あらかじめ規定されているかたちを表現するものであるという簡単な解釈にとどまっている場合が多いように思われる。密教美術の場合には儀軌によつてしばれるているので、平安時代以後の日本の仏教美術は形式化してしまつたと考えている人達も過去には多かつた。しかしその儀軌がインドで記された時には、その儀軌の筆者の芸術的想像によつて、最も適当と考えられたほとけの理想の姿をこ

ばによって記しているのである。

以上のようなことは既に大乘仏教のはじめの頃から行われている。それはほとけの観仏・観想・観念などということばで述べられているように、ほとけの姿、その仏の住む浄土世界の状況について、その詳細を述べている経典がみられるのである。すなわち、その内容はその経典が成立した時代、場所の芸術を考えさせる資料でもある。またその内容による表現が後世になれば、時と場所のちがいでよってさまざまに変化している歴史が多く作品をみることによって知ることができるのである。仏教美術について考える場合には、以上のような問題を背景において考えるべきではないだろうか。

仏の姿については、三世紀初め頃には三十二相・八十種好というような特徴が経典に現われはじめている。これらのものは仏教美術の展開を考えるためには、最初にとりあげるべきテーマであると思うのである。

これらのなかに説いている仏の姿の特徴について考えてみるならば、三十二相の内容はインドのガンジス河の流域で、アーリアン系統の人達によって考えられたものとみられ、そこではインド的な豊かな仏身の表現すら否定する規定が行われている。このなかの特徴の多くは日本の仏像にも伝えられている。それに対して、八十種好の特徴のなかには南インド的表現の特徴が述べられていることは興味あることである。しかしこの両者の内容に大きくちがう点があるにも拘らず、何れも人間の姿によって、仏のさとり境地を表現しようとしていることにおいて、形の上で南北のちがいはあっても一致していると感じられる。これらの規定によって表現された仏像は時代と場所のちがいで、互に交流しあって、その表現はインド国内においても全くちがったものとなっている。それらのものを、パキスタンのガンダーラの仏像と比較してみると全くちがったものとなっているのである。即ちインドの仏像は人間を超越したものの表現を考えているために、釈迦の伝記を表現するものが著しく少ないことは大きい特徴とみななければならない。それに対して、人間としての釈迦の表現から出発しているガンダーラ仏には釈迦伝が中心となっており、その作例が著しく多いのである。

以上のような例をみても、仏教美術の学問を考える場合には、その作品の根源となっているほとけの理想の表現から出発して考えるべきであることに気付くのである。私は仏教美術作品について学問的に考察する場合に、こういう問題から出発して、考えを展開してゆくことに心がけているのである。